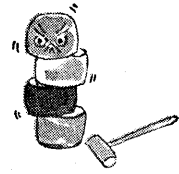


出会いーそれから



秋 山 達 子

チューリヒは、例年十月初めごろから天候が崩れて、雨や霧が多くなり、寒さが身にしみるようになる。それから三月末ごろまでの約半年は、アルプスから北ではほとんど太陽を見ることがない。暗く淋しいけれども、不思議と心が落着いて本をひもとぎたくなるような北ヨーロッパの冬がくる。表通りや中庭にたくさん椅子やテーブルを並べて、戸外でお茶や食事をサービスしていた街角のレストランも、表扉をびったりと閉めて、その中にもう一つ重いたれ幕をさげ、窓ガラスを二重にして冬に備える仕度がはじまる。その年に収穫したばかりのぶどうが、少し発酵しかけたワインになる一歩手前の甘酔っぱいザウサーが出まわるのもこのころであり、街にはイタリーに近いティツィーノ地方でとれる焼栗の香りがただよい出す。ヨーロッパの冬は急速にやってくる。

湖畔のレストランの涼しい木陰に腰をおろして、のんびりと道行く人や水鳥の遊ぶ姿を眺めながら、ヨーロッパ最初の夏を思う存分楽しんでいた私は、十月はじめにチューリヒのユンク研究所に学生として登録し、外国で外国語によるはじめての講義に、期待と不安のまざりあった落着かない気持ちで出席していた。

日本の多くの学徒がそうであるように、私も一度はヨーロッパで勉強してみたものと漠然とした夢をいだいて、また多くの女性がそうであるように、なんとなくパリに憧れてフランス語の勉強をしたりしながら、たまたま訪れた機会をつかんで日本をたってはきたけれども、どの大学でどの先生について何を勉強しようというほど、はっきりした決心をしていたわけではなかった。それでも、パリ大学で宗教学または東洋学を専攻してみようとい

う一応の目標がないでもなかったけれども、訪れたパリは夏休み
のせいもあって、日本から紹介された先生方は皆、休暇で旅行
中、パリ中にみられるのはアメリカ人や日本人の観光客ばかり
で、東京とかわらないむしろ暑さや、外国人には冷たいフランスの
空気が、安ホテルの味気なさなどから、すっかり意気阻喪してしま
って、一刻も早くパリから逃げだしたい気分になってしまった。

今から十年も前のことではあるけれども、そのころのパリには既
に語学やデザインの勉強に住みついてた日本女性も少なくなくな
ったし、なかには日本人観光客の通訳をしたり、香水店の売子をし
ながら勉強にはげんでいる方もあったが、どの人にあってもパ
リ滞在をすすめて下さる方はいなかった。予定を早めてパリを出
た私は、どうやら言葉の通じるフランス語文化圏内の各都市をま
わり、夏の終りに友人のいるチューリヒに到着して善後策を考え
ることになった。そして偶然開いた新聞に、一度訪れてみようと思
っていたユンク研究所で、中国古典の『易経』の講義があること
を知り、外国人が中国古典をどのように解釈するのだろうかとい
う興味も手伝って、地図を片手に研究所の扉をたたいたのであ
る。ユンク研究所はチューリヒの山手の、美術館や劇場、大学付
属の研究所が多い静かな一画にあり、つたのからだ少し大きめ
の洋館の二階で、うっかりすると通り過ぎてしまうような目立た

ない建物の中にある。日本で普通考えられている研究所や学校の
イメージとはあまりにも違うので、よく日本から訪ねられる方
が、通りの反対側にある中学校の方にまちがって行ってしまわれ
たりするくらいで、その時の私はその小さな研究所の一室がその
後四年間にわたる私の心の住みかになるであろうとは考えてもい
なかった。

その時、外国ではじめての外国語の講義にどこまでついてい
けるものかと小さくなって教室の後ろの方にそとすわった私の
目に、なによりも心強ぐうつったのが、東洋からきたらしい人の
姿であった。そして最初の休憩時間に久しぶりの日本語で話しあ
えたのが、現在京都大学にいられる河合隼雄先生、同志社大学に
いられる樋口和彦先生、そしてソウル大学に帰っていられるとい
う韓国からの李先生であった。はじめてお目にかかった先生方で
あり、紹介状の一つも持っていなかったにもかかわらず、さっそ
く研究所のようすやら、入所の手続きなどを細かく教えて下さっ
たご好意は、今でも忘れられない。五月以来約四ヵ月の外国の一
人旅で緊張しつづけてあった私は、ほっと肩の荷をおろしたよう
に感じた。お昼をご一緒にすることになって、近所の美術館付属
の明るいレストランで、日本にいたころの私にかえって、元気に
おしゃべりをしながら、透明なガラスのコップに入った暖かい一

杯の紅茶を飲んだ時の、心暖まる気持ちはその時の私にとって涙が出るほどうれいものであった。

外国旅行というものは、緊張して走りまわっている間はそれほど意識をしないものであるけれども、心の中ではいろいろな印象がまざりあって、知らないうちに非常に疲れるものである。そんな時に会おう小さな出来事が、肯定的にも否定的にも大きな影響を心に与えることがある。最近よく聞く外国での、特に女性の出会う事故も、このような所に原因があるのではないかとも思われる。かつて私がしたように、はっきりとした目標をもたずに外国へ出られることは決しておすすめでできないが、もっとしっかりした気持ちで行かれても、行ってから予定通りにはことが運ばないことも多い。そして外国では偶然の重なりや、意外の出会いが大きな意味をもつことが多い。仏教学を専攻していた私は、フロイトやユングはおろか、一般心理学についても大学での教養課程で得た知識以上にはもっていないなかったし、精神分析はそのころの私にとってあまりにも縁遠い学問であった。またいろいろの方から話には聞いていたけれども、特にユング心理学にははっきりした意識も興味もあつたわけではない。にもかかわらずユング研究所になんとなく籍をおくことに決め、それから後四年間にわたってユング心理学を学ぶことになったのは、このような偶然の出会いの

数々を背景としている。このような態度は西洋的な行き方から考えれば、まったく自主性がなともいえるであろう。また東洋的で、さらに女性特有の計画のなさともいえるかもしれない。私のあまりにも漠然とした、無意識のなにもかき導かれて行動するようなあり方は、自分を中心とした意識的で明快な西洋のあり方と、当然ぶつからずにはいられなかった。

窓外にはチラチラと舞いだした粉雪が急に量を増して、まんじ模様を描いていた。暖房のよくきいた教室で、ユングの高弟だったという老婦人の講義に耳をかたむけていた私は、急に背筋に寒さを感じて教室の一隅に席をかえ、先生に背を向けて雪景色に見入ってしまった。講義の中の頭からのしかかってくるような老婦人の激情的な声、大仰な身振り、押しつけてくるような個我の強さに私は耐えられなかった。それは西洋的にいえば強さであるが、東洋的には見苦しいほどの自己の主張に思えた。それからの四年間の毎日は、このような西洋との出会いにおける私の精一杯の闘いと理解に明けくれた。異なる文化の出会いの火花の中できたえられて、今日の私があるものと思う。そしてその時の経験を生かして創造していくことが私の使命であるとも思う。

(大正大学)